

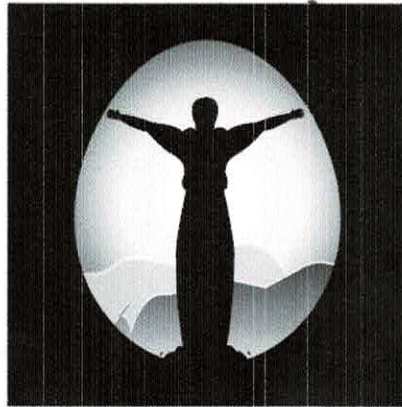
荻窪教会会報「つのぶえ」

2026年イースター・メッセージ

小海 基・荻窪教会牧師

2026年イースター・メッセージ 復活のキリストと出会う

小海 基



<カット・杉本功雄>

キリストが、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。

(1コリント15・4〜8)

くだいほど、パウロは復活のキリストに出会った人たちを挙げています。ひとまとめにして「いろいろな人に現れた」などというのとはわけが違う！ 復活の主イエス・キリストとの出会いは皆違うのです。どれに特別な意味があるというものでもありません。皆違

うから重い、びつくりするような出会いです。そこに説得力がある。ずいぶん前に農伝を卒業された佐藤徹牧師(福井の丸岡教会)が、「ハンセン病者へのキリスト教伝道―療養所教会の成り立ちと長島聖書学舎を中心に」という修士論文を福井県立大学に提出され、修士号を取ったというので読ませてもらったら、これがすごぶる面白い！

農伝に来る以前は福祉系の大学で学ばれていたこともあって、佐藤牧師は卒業後全国のハンセン病療養所を訪ねるようになりま

す。故郷、家族、社会から切り離され、不妊手術まで受けさせられたという悪名高い「隔離政策」の被害者でもあった患者たちの生き証人たちも、各地の療養所でもほとんど減っています。佐藤牧師はその一人ひとりにインタビューをしながら、岡山の長島愛生園に「長島聖書学舎」(三年制、三期十年、二十名もの牧師を生み出し

一九七二年解散)という神学校が誕生していたことに出会っていくのです。たくさん説教集も残さ

れています。しかし「隔離政策」によって社会から締め出された人たちの歴史は、日本のキリスト教史から無視され続けてほとんど知られていません。佐藤牧師の論文はそこに光を当てたのです。ハンセン病という「十字架」を負ったからこそ、同じ重荷に苦しむ仲間に「復活」の光を説得力を持って語れると、こうして生まれた二十名の牧師たちの働きで、なんと当時、全国のハンセン病患者たちの3分の1がキリスト者になつていったというのです。日本のキリスト教人口は新旧教派合わせて未だに1%に満たないのと比べて、これは全盛期の韓国のキリスト教人口の割合に匹敵する驚くべき割合です。

「復活」の証人というのはまさにそういうことではないでしょうか。他に変えられない自分の暗闇と死の奥深くで、復活の主が出会って下さる。そうした証言こそが力を持つのです。「月足らずで生まれたような」自分にも「現れ」、出会い、光を照らしてくださったという「証人」なのです。